

9月2日（水） 第2回市民ワークショップ 記録

富田さん：第2回目は、まちづくり郡中が取り組んでいる移住事業について、まちづくり郡中の方のお話を聞いていただいて、その後、私たちの町で移住者を受け入れるのであれば、どういう人に来て欲しいか、あるいは、こういう人に来てもらっては困るなどでもかまいません。移住者に来てもらうのであれば、どういうことが必要なのか、近所に住んでいる人はどういう風に協力をすればいいのか、そんなとき伊予市にこんな制度があったらいいなということをごみなさんで考えていきましょう。それでは、お願いします。

谷本さん、重松さん：(まちづくり郡中活動事例紹介)

富田さん：どうもありがとうございました。(郡中地区についての紹介)

それでは、今日は郡中地区について考えて行きます。これからワークショップをするにあたり、前田先生にこれからの進行をお願いしたいと思います。(ワークショップについての注意事項を説明)

前田先生：こんばんは。それでは、アクションプランについての説明を簡単をお願いします。

富田さん：(移住定住に関する推進体制整備事業について説明)

前田先生：ありがとうございます。民間の人たちが頑張るような内容をみなさんで考えていければいいなと思います。郡中地区で移住を受け入れるとしたら、どんな人に来ていただいたらいいかを最初に話し合っていきたいと思います。また、そういう人たちが入ってきたとき、みなさんは現場で受け入れる立場ですが、どんなことが課題になるか、どんなことが気になるかを話し合ってください。また、その気になることを解決するために、自分たちはどんなことができるか、行政はどんなサポートがあるかを話し合っていきたいと思います。この4つを話し合うのは、時間的に厳しいので、重点的に話し合ってください。郡中という土地をイメージして考えてください。それでは、各グループで進めてください。

～各グループでワークショップ～

前田先生：それでは、各グループで話した内容をみんなで共有できたらいいなと思います。

1番目のグループ：チームの名前は、ぬるいのがい〜よです。郡中にどんな人がきて欲しいかを考えたとき、最初に起業する人が来たらいいのではと考えましたが、いきなり起業も大変なので、後々起業をしてくれる人がいたらいいのではと考えました。また、松山に住

んでいますが、家を建ててこちらに移りたいという人や、中山間地域の暮らしもきついで、まち暮らししませんかという人でもいいのではないかと思います。他に意見としては、南予出身者が南予に帰るのは遠いけれど、県外から伊予までなら帰れる方もいますし、松山にいる南予出身者が伊予までなら、街中に行くのも南予に帰るのもできるような場所に伊予市はあるところが良いという意見もありました。

しかし、魅力を発信できていないので、こういう人たちに伝わっていないのかもしれないので、郡中の魅力をどんどん発信してくれる人が欲しいよねという意見が出ました。

そのときに、IターンなのかUターンなのかどっちが郡中のまちに合っているのか、Iターンの人にとって、欲しい情報は何なのか、Uターンの人にとって欲しい情報は何なのかといったことを見据えて話し合った方が良いという意見がありました。Uターンは覚悟がいります。いっぺん帰ってきたらもう逃げ道がありません。そこを見極めた方が良いでしょう。

ほどよい田舎といえますと、ほどよい都会、ほどよい田舎というものは全国にいっぱいあるので、その中で郡中の魅力は何なのでしょう。うっかり言ってしまった、伊予市には何もないというところも、実は魅力であり、都会にもいろんなものがあるので、もともとそろってれば、何もないことが魅力に感じるのではないかと思います。あと、業種でも何でもそろっていますが、その中で組み合わせたらもっと良くなるという、商店街の中にあるものもないものを探して、組み合わせたらいいような業種を探してみます。そもそもなぜ空き家が見つからないのか、どうして貸そうと思わないのかというところをもう少し丁寧に調べていく作業が必要なのではないかと思います。ここは手を出せていないので、今後必要だと思いました。

あと、魅力としては災害がないことです。災害が少ないといっても、変わった奥行きが長い家がある中で、どこかが崩れたらどれだけ影響が出るかということや、そういう防災面のこともやっていくと、地元で暮らしている人にとっての暮らしを考えていくのには大事なことで、移住は他所から来た人のためだけではなく、地元の人々の暮らしにとってもどんな風に関係しているのか、ということをもう少し考えていけばいいのではないかと思います。県内でパイを奪い合いたくはないので、競うような移住はやりたくありません。自分たちがやっていることをこうやっているから協力してというよりも、愛媛新聞や地元の放送局、第三者が取材してくれることで、自分たちを客観的に見ることができます。全国的にも愛媛新聞は、地元のニュースを取り扱うので珍しいです。地方紙があれだけ独自記事を書いていることも珍しいので、そういったことも大事にしていけばいいのではないのでしょうか。パン屋さん取材のため密着してカメラがついていることにはびっくりしましたが、そういうマスコミの人の使い方も大事にしたらいいいのではないかと思います。

前田先生：ありがとうございました。では次お願いします。

2番目のグループ：伊予市、砥部合同チームです。郡中に来て欲しい人を考えましたが、年

年齢層でいうと、退職後のグループや子育て世代のような若い人に来て欲しいです。また、地域の行事に積極的に参加してくれるような楽しい人、明るい人、コミュニケーション能力がある人に来て欲しいです。受け入れ側がこの人に来て欲しいというのではなく、向こうが選んで来てくれるようなものが理想だと思いました。

女性目線でいうと、まちの中でカフェをしてくれる人が良いです。

また、よく学んで、趣味を持っている人に来て欲しいです。

そういう人を受け入れるにあたっての課題としては、仕事、家、孤立しないような仲間作りがあります。

その課題を解決するために、地域住民は、行政の方や役員の方だけでなく、人口減少について興味を持つことが大事です。市民は普通に生活する中で、気付く機会が少ないと思います。

また、住民も移住者に対して、あいさつなどコミュニケーションをとれる住民でありたいです。

行政には、補助金や助成金などを出して欲しいです。また、移住者に対して、空き家バンクやお試し住宅のような何ヶ月か滞在できるものを作ったり、移住者用の公営住宅を用意しておき、何年、半年くらい生活できるものを作ったりして欲しいです。また、シェアハウスなどを作ってみてはどうでしょうか。

砥部はワーキングホリデーをやってみようかと考えているそうです。仕事を半年や1年くらい臨時的に用意できるシステムが欲しいです。

グループの方に移住のフェアなどに行かれたことのある方がいて、その方の話では、相談に来る方は、受け入れ側としては家や仕事を心配していると思っていますが、実際は、釣りができますか？や、山登りはできますか？など、趣味が実現できるかどうかということころを最初に聞いてくるそうです。これで終わります。

前田先生：ありがとうございました。次のグループお願いします。

3番目のグループ：郡中の人がない班です。外からみた伊予市のイメージで話は進んでいったのですが、まず、郡中と双海の違いについて話し合いました。それぞれスタイルが全く違う地域性があり、客観的に見て良いと思います。また、郡中の人たちは、受け入れ体制や、移住についてあまりぴんときてなさそうです。例えば、隣に住んでいる人は、移住者なのか、単に仕事で来ているのか分からないだろうというところから、考える機会もなければ、関心もないのではないかと思います。このような状況なので、受け入れ体制を整えようとしても、何からしていいのかも分からないだろうし、足並みもそろわないと思うので、目立つ人を先に連れてきて、先にムーブメントを先に起こして人をひきつけていく方法があるのではないのでしょうか。

他には、郡中で何かをやってくれそうな人、求心力を持ってくれそうな人に来て欲しいです。

商店街を盛り上げてくれそうな人や、空き店舗を使って商売をする人、郡中らしさの出た、人があこがれるような、共感するような何かを発信するような人に来て欲しいです。そういう何かを発信する人の周りに、少しずつ人が集まってくるような動きが生まれたら良いと思います。そのときに、それを応援する人や地元の方ができる協力という、そういう人が来たときには、不思議がらずに気さくに接してくれるような体制があれば良いです。キョロキョロ隊のような地元を楽しんでいる人たちは、きっと移住者にも楽しみ方を教えてくれると思うので、こういう人がもっといたら移住しやすいのではないかと思います。エンターテインメント性があり、起爆剤になる人、個性の強い人に来て欲しいです。双海のような地域に住んでいるご高齢の方が、車を運転できなくなったら、郡中のような便利なところに住んだほうが良いと思います。実際のところ、それに一番需要があると思います。

魅力のある町を地元の人たちが作っていき、その中にエッセンスとして移住者が入っていければ良いと思います。

あと、県人会に皆さんは入っているのかな？とよく思います。そういう人にアクセスする方法があれば知りたいと思いました。以上です。

前田先生：ありがとうございます。では次お願いします。

4番目のグループ：バラエティ班です。メンバーは、郡中に住んでいる人、南伊予に住んでいる人、双海に住んでいる人、中山に移住してきた人、中山の地域おこし協力隊です。郡中という名のイメージがわからない。硬い感じがするので、もう少し柔らかいイメージを作ればいいのではないのでしょうか。フジ伊予店のイメージはありますが、フジが郡中にあるイメージはないので、イメージ戦略をしてみたらどうでしょうか。

また、郡中で暮らすイメージを伝えたら良いのではないかという意見がありました。また、郡中という言葉があまり前に出ていないので、露出度を増した方が良いです。

また、来てもらいたい人のイメージは、ターゲットを絞った方が良いと思います。例えば、元気な人や起業する人に絞った方が良いです。また、まちづくり郡中は高齢者をターゲットにしているので、都会に疲れている一方、田舎はちょっと嫌だと思える人であれば、郡中はちょうど良い町であると思います。車に乗らなくても生活できる地域なので、田舎で暮らしている方で、車に乗れなくなったらどうしようと考えている方をターゲットにしていれば良いのではないのでしょうか。

後は、元気でスキルを持つ高齢者の方に来ていただいて、商売を行ってもらったら良いのではないかと思います。ただ、高齢化だけでなく、若者にも来て欲しいです。そして店をやって欲しいです。郡中の全体的に住む家は、マンションなどありますが、田舎と比べてやや家賃が高いため、手当があればいいのではないのでしょうか。また、家賃を払える経済力のある人に来てもらわなければいけないのかという意見がありました。あと、空き家物件、店舗が出てくるのかなど、まだまだ問題がたくさんあるので考えていかなければい

けないという意見がありました。

小遣い稼ぎができる仕事の提供をして欲しいです。公園のような休むところがないので、整備ができたらいいなと思いました。ウィンドウショッピングのできるお店が少ないので、そういうお店があったら町歩きもしやすいのではないかと思います。また、商店街に駐車場の看板があったら見やすいのではないかと思いますという意見がありました。

最後に、暖かいし、災害が少ないし、便利です。昔に比べれば、子どもの数がだいぶ減ったので、それに対して危機感を持たなければ、難しいのではないかと思います。以上です。

前田先生：ありがとうございます。では次お願いします。

4番目のグループ：メンバーは市役所の方と JOIN の方で構成されていました。今回は、移住者に対して、行政としてできることについて自分の立場、予算等を度外視して考えました。まずは地域間連携です。松山市は移住定住1万人構想という計画を出してやっており、そういう面では松山・県・市内の旧自治体の地域間連携をやっていきます。また、マスコミへのPRをやっていく必要があります。

移住した場合には、大学や企業などいろんな団体にご協力いただかなければなりません。産官学民のマッチングを支援するようなことも大事です。あと、経済の活性化が必要です。起業する人を支援することも大事です。商店街の空き店舗を活用するビジネスプランコンテストの開催し、金銭的支援すると良いです。

なかなか住宅等の整備にはお金がかかる、お試し住宅や空き家改修、移住者用の住宅・公道・住宅地の整備をすると良いのではないのでしょうか。松山に通う通勤の補助であったり、低金利の融資であったりを行政がやってみてはいいのではないのでしょうか。

また、他にはよろず相談のような生活支援をしていくべきではないのでしょうか。

あと、Uターンの方に帰ってきて欲しいです。そのためにはふるさと教育を学校教育、社会教育の場でしていくべきであるという意見が出ました。以上です。

前田先生：ありがとうございます。みなさんからたくさんアイデアが出ました。郡中地区に来る人たちのイメージを考えると、若い人もいるし、高齢者もいるし、元気な人、起業したい人もいるし、いろんなアイデアが出たと思います。先ほどあった、来たい人に来てもらう、郡中の良さを理解してもらえる人に来てもらうということがやっぱり大事なかなと思うので、そういうところをしっかりと訴えていくことが大事だと思います。また、郡中の良さを理解するというにしても、郡中の良さが何なのか、もっと実感持って伝えられるようにしなければなりません。何で郡中に行くのかなど、そういう郡中の魅力の発信や、差別化などそういうものをしっかりと考えて発信していくということが大事になるのかなと思います。そして、その発信のときに、先ほどの行政の人たちのお手伝いを含めてあるのかということもあります。また、第三者の発信は信頼性がある一方で、自分たちがいいよ、いいよといっても誰も信用していないケースもあります。そうすると、第三者

の人に郡中の良さを発信してもらうための材料をどう提供できるのか、というところの5つのテーマを住みやすさという形で提供しています。では、それが実感としてあるのかどうかといったところを、使う立場や市民の立場からうまく刷新ができるのかどうか、ということも大事なテーマでなければまずいのかなと思います。そういう意味では、地元の人をまず巻き込んでいかないといけない部分もあると思います。

ではそういうこともやっていくうえで、民間の人でどうやるかという話でいうと、受け入れて応援したり、先ほどあったキョロキョロ隊や地域おこし協力隊など、市民の人たちが受け入れて応援したりといった形があります。では何を応援するのかという話のときに、仕事を紹介したり、家を提供したり、仲間に入ることができたりといったことをしてくれることは大事ですよね。それをやるためにも、市民の人たちにとって、郡中の人たちにとって移住の必要性って何なのかをしっかりと伝えていくということは大事なかもしれない。そういうことが共感できる人が増えてくると、民間でやるべきことっていろんなアイデアが生まれてくると思います。そうすると、その共通認識です。移住の必要性を内向きにしっかりと伝えていくことをしていきます。外向きには、郡中の良さを伝えていくことをいろんな形でしていくことが大事かなと思います。

そういう動きが主体になったときに、行政の人たちが民間の動きを段々ほっとけなくなってきた、じゃあ補助金を出しましょう、助成金を出しましょうということになります。いきなりお試し住宅をするのは、行政としては難しい。民間の人が頑張っているから、伊予市はそこに乗かって応援するというところにどうしてもなってくるので、お試し住宅や空き家対策など、行政が得意なハード面を担ってもらえるような動きを誘発していくということが大事です。民間が主体でやっていかなければならないのかもしれないと思いました。それからソフトの面でいうとワーキングホリデーだとか、行政の人たちの臨時的職業を作っていきます。今、東北で除染をということを臨時的な仕事として行っています。それでは、この近辺で地方再生ということを臨時的な仕事をつくることができるのかどうか、アイデアを出せるのかどうかということを含めて考えていく、ということはあるかなと思います。

もう一つは、個々の人に対してですと、通勤の助成や税金の助成など、そういうことがやれるかどうか難しい問題はあると思いますが、その移住の必要性が市民だけでなく、行政にしっかりと伝わっていったときに、そういうアイデアが生まれてくると思います。そのようなムーブメントを起こしていかなくてはいけないので、郡中、あるいは佐礼谷で、あるいは双海でそういう移住の必要性をみんなが感じて、自分たちができることからムーブメントを起こしていくということは、すごく大事だということをみなさんの意見から感じました。これからどうやってアクションプランに繋げていくかは、これからの作業になるが、自分たちの活動の中で少しでも実現できるようなプランをまとめていきたいと思っています。また、いろんな意見を寄せていただければと思います。これでワークショップを終了します。

富田さん：ありがとうございました。次回は、10月14日翠小学校にて行いますので、よろしくお願ひします。ありがとうございました。

